

「_____」は、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編及び
中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編より引用

道徳性は、次のように記述されています。

- ・「思考や判断、行動などを通してよりよく生きるための営みを支える基盤となるもの」
- ・「人間としての本来的な在り方やよりよい生き方をめざして行われる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤となすもの」
- ・「人間らしいよさであり、道徳的価値が一人一人の内面において統合されたもの」

では、この道徳性は、良心のはたらきや「私」の道徳的行為にどのようなにはたらいっているのでしょうか。

一つ目に、道徳的判断や道徳的行為を求められる価値の場に入ったことを察知するはたらきがあります。知覚によって認識された状況を分析し、道徳的判断や道徳的行為を求められる道徳上の問題場面であることを瞬時に判断します。それによって、良心が「私」に「おーい」と呼びかけることになります。

二つ目に、価値の場に灯っている価値の灯りを見つけるはたらきがあります。価値の場によって異なる道徳的価値を見て取り、その骨組み（例えば、「勇気」「自然愛護」など）が何なのかを判断します。これによって、良心が「勇気を出せ」「自然を壊すな」などを「私」に「命じ」ることができます。

三つ目に、その価値の場と価値の灯りに相応しい道徳的価値を、「道徳的価値が一人一人の内面において統合されたもの」の中から立ち上げるはたらきがあります。例えば、「勇気を出せ」という指令に基づいて、「勇気」を中心とする道徳的価値のネットワークを立ち上げます。このネットワークは、頂点を下に向けた円錐の形のイメージで、3 階建てになっています。3 階部分は中心となる道徳的価値（勇気）、2 階部分は、それに関連して道徳的行為を成すために必要な他の価値（実践的価値）（この場合、「善悪の判断」や「公正」など）のネットワークが上部底面の横に広がり、それら多くの道徳的価値を支える価値（基本的価値）（例えば、「自律」「誠実」）が、1 階部分につながっているという構造をしています。このように、道徳性は、複数の価値の骨組みを内包した個別の道徳的価値と、それらと複雑につながり合っている他の様々な道徳的価値の「統合された」状態から、価値の灯りに呼応し、最善と考えられるネットワークを立ち上がらせるはたらきがあるのです。

そして、「私」は、立ち上がってきた道徳的価値のネットワーク全体を見て、価値の骨組みに意味を付与して、行為の動機や根拠を造り上げ、行為の正当性を確立します。それと共に、その動機や根拠から論理的に相応しい行為を考え、判断し、行為に移そうとします。これには既に正当性が確立されているので、行為する意欲の源にもなり、自信をもって行動することができます。道徳性は、このような「私」の主體的な考え、判断、行動の基盤となり、また、それを見守るように構えていて、指令に従った道徳的行為になれば穏やかになり、次の価値の場での実践への意欲につながりますが、自分の欲や都合を優先しようとしたり、行為を躊躇したりしていると「私」を責め（良心の呵責）、結果的に行為に至らなかった場合には、その後も「私」を苛みます（後悔の念）。これが四つ目のはたらきです。

さらに、道徳性は、「道徳的行為を可能に」するために、これら全てのことに関わり、調和的に矛盾なく導いているのが道徳性の 5 つ目のはたらきです。道徳性は、価値の場に入ったときから道徳的行為の終了まで、良心として「私」に呼びかけたり、価値のネットワークを立ち上げたり、「私」の思考、判断、行為に深く関わったりして、「よりよい生き方」をめざして、一貫して作用しているのです。

これが「自己の良心に従って人間性に外れずに生きようとする心」であり、「人間としての本来的な在り方やよりよい生き方をめざして行われる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤」をなしているものなのです。

このように5つのはたらきをまとめると、道德性の課題も見えてきます。まず、一つ目の価値の場に入ったことを察知する力を高めなければなりません。これを見逃したり察知できなかったりすると、道德的行為には全くつながらないことになります。二つ目の価値の灯り（価値の骨組み）をできる限り正確に捉える必要があります。友達が自分の力でがんばろうとしているのに、それを見誤って手助けをしてしまうことは、道德的行為とは言えなくなります。そして、全体を通して、自らの道德性が、正しいもの、絶対的なものと固執してしまうと、道德的行為に至らないばかりか、人を傷つけてしまうことになる場合があります。例えば、集団の中で弱い立場の友達から灯り続けている価値の灯りを見つけることができず、悲しい、辛い思いをさせ続けてしまうこともあるでしょう。また、人間には男と女しかいないという価値観に縛られてしまうと、「男だから」「女だから」と決めつけてしまったり、自分の性に違和感を覚えている人のことが理解できなくなったりする場合も起こってしまいます。

では、これらの課題を乗り越えるために、価値の場や価値の灯りを見逃さず、正しく捉え、自らの道德性を磨き、高めていくには、どうすればよいのでしょうか。

私たちの道德性といっても、全ての道德的価値を網羅しているのではなく、次の3つの範囲のものに限られています。

- ・自分が理解できる範囲
- ・自分が想像できる範囲
- ・自分が義務と思う範囲

自分が理解できる範囲とは、これまでの経験や学習の中で培われた道德的価値の意味や大切さをことばで表すことができる範囲のことです。友達を思う心には「友情」ということばがあり、友情とは、かくかくしかじかの意味や大切さがあるということをことばで表すことができるということです。

自分が想像できる範囲とは、時間的にも空間的にも、自分の位置と離れていても、その価値の場や、そこに灯っているだろう価値の灯りを思い描くことができる範囲のことです。遠く離れていても、病気や飢餓で苦しんでいる人たちの思いに共感することができます。

自分が義務と思う範囲とは、人としてやらなければならないと思えることということです。これは当たり前のことだ、これをしなければ恥ずかしいと思えることで、称賛や賛辞を期待するのではなく、やるべきだと思うことです。

この3つの範囲を「人間は本来、よりよく生きようとする存在であり、そのために人間性をより高めようと努力するすばらしさをもっている」と思って、自分の範囲を広げることこそ、自らの道德性を磨き、高めることになります。そのための手掛かりとなるのは次の4つのことです。

一つ目には、体験をすることです。体験をすることにより、価値の場はどのようなものなのかを考え、そこにどのような価値の灯りが灯っているのかを現場で見つけることができます。例えば、いつもの散歩コースを健康のために早歩きをしてみよう、文化財を回るウォークラリーに参加して伝統文化について考えてみようなどのことです。また、道德教育においても、田植えの体験をしてみるとか、職業体験をしてみるとかありますが、どのような体験でも、大切なことは振り返ることです。体験したことが、自分にとって、人として、どのような意味や大切さがあったのかを振り返ることで、価値の場と価値の灯りがつながり、正しく捉える練習ができます。学校においては、「道德科は、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動などで学習した道德的価値を、全体にわたって人間としての在り方や生き方という視点から捉え直し、それらを発展させていこうとする時間である」として、道德教育や道德科が、児童生徒の道德性を磨き、高めているのです。

二つ目に、ことばで表現することです。価値の灯りによって、「誠実」や「家族を大切に」などの価値

の骨組みしか直観的に把握できません。それを受けて、良心が「正直にすべし」と「命じ」ますが、「失敗をして怒られるかもしれないのに、なぜ、正直にしなければならないのか」という自問が湧き起こったとき、「ここで言う人間として生きる喜びとは、弱い自分を乗り越えるだけでなく、自分の良心に従って生きることであり、人間のすばらしさを感じ、よりよく生きていこうとする深い喜び」になるよう、その答えをことばで表現し納得しなければ行動に移すことはできません。これをしっかりと表現し、意味付けすることは、道徳的行為に移す意欲や自信につながりますし、弱い自分からの揺り返しがあっても、この意味付けによって「強さと気高さ」をもって乗り越えていくことができるでしょう。また、普段の大抵の道徳的行為は、直観的に判断し、行動したり、感覚的に行動したりしていて、ことばであれこれと考えることはあまりないかもしれませんが、複数の価値の中から選択しなければならないモラルジレンマのときや、欲と良心が対立する葛藤の場面では、正当性の根拠をどうしてもことばで表現し、モラルジレンマのときは止揚的に解決する答えを見つける必要がありますし、葛藤の場合は、自分の「弱さと醜さ」を挫くような意味付けが必須になります。それらは、自分自身に向けても、他者に向けても必ず表現しなければなりません。このように、人としての視点で考え、それをことばで表現するためには、普段から価値の場で自問自答することです。児童生徒には、道徳教育や道徳科の時間で、先生方からの道徳的価値に関わる問いに、どんどんと語らせることが鍛えることにつながります。これらのことばは、良心のことばとなり、人としての「一つ上」の視点からのことばとなるのです。

三つ目は、その体験やことばに他者の視点を取り入れることです。自分の道徳的な見方や考え方を常に反省し、ときには批判して、よりよいものに改めていくことが、自らの道徳性を磨き、高めていくこととなりますが、自分一人の力ではなかなか難しい。そこで、他者の見方や考え方をまずは受け入れて、それと自分のものとを比べることが第一歩です。そして、それを鏡とすることで、反省もでき、改めるところを改めることができます。さらに、他者の見方や考え方の方がよいと思われるなら、それを謙虚に認め、取り入れて、自分の見方や考え方に書き加えたり、自分の見方や考え方を書き換えたりすることです。これらによって、自らの道徳性が広がっていくことになります。

四つ目は、理想像をもつことです。もちろん、自分の道徳性を基に理想像を思い描くこともできますが、実際に道徳的行為をしている人を見て、「いい人だな」「あの人のようになりたい」と思うことの方が、価値の場と価値の灯りと道徳的行為がつながって「人間の行為の美しさに気づいたとき、人間は強く、また気高い存在になり得る」ことができます。その人は、「人としての本来的な在り方や生き方」を具体的に表してくれているので、理解できる範囲や想像できる範囲を大きくしやすくなり、義務と思う範囲のハードルを低く思うことができます。その人は、街にいる人であり、道徳教育では、ゲストティーチャーとして出会う人であり、教科書の教材に出てくる人なのです。そして、それらによってより大きくなった道徳性により、これまで気に留めなかったいい人を見つけることができ、よりいっそう道徳性を磨くことができ、高めることができます。

これらによって、価値の場や価値の灯りを見逃さず、正しく捉え、自らの道徳性を磨き、高めていくことが期待できます。そして、その先には、より「道徳的行為を可能にする」道徳性が大きくなっていくことが期待され、「人間としての生きる喜び」を感じながら、「よりよく生きようとする存在」となっていく道が拓かれていきます。